

人間の最後の砦？

館長 今川 英子

常設展示場を中心とした大規模改修から一年が経ちました。四月以来、新型コロナ感染拡大による休館が二ヶ月半余りあり、その後は感染防止対策に努めながら平常通り開館しています。今年度の入館者は例年の四割ほどです。改修に関するアンケート調査では、「大変良い」「良い」が全体の約九割を占め、職員一同、胸をなで下ろしているところです。さらにより良い文学館の在り方を目指して努力してまいります。

ところで今年度の「林芙美子文学賞」と「子どもノンフィクション文学賞」の表彰式はオンラインで開催しました。本来は文学館などの会場に受賞者をお招きするのですが、コロナ禍のため、昨年は中止を余儀なくされておりました。前者の受賞者は正賞の一人でしたが、後者のそれはドイツ在住のチャケさんをはじめ全国から十二人です。その全ての参加者と選考委員が八〇インチの受像機に集合した画面は圧巻でした。表彰式の様子は、受賞者の中に秋篠宮悠仁さんがいらしたことで、多くの報道陣が訪れ、テレビや新聞で全国発信されました。子どもたちがそれぞれの住まいから当たり前のように参加できているという仮想現実(?)に、デジタルに馴染めない筆者は戸惑うばかりでした。

「見て、聞いて、調べて、自分の言葉で書いてみよう」というこの賞については以前にも紹介しています。新しいことを初めて知る驚きや感動を瑞々しい言葉で綴った子どもたちの文章は、真つ直ぐにおとなの私たちに伝わり、いのちが洗われます。小学五年生のチャケさんは、

お母さんは日本人ですが、東ドイツのドレスデン近郊に住んだ父方の曾祖父からの家系を、戦争と東西分断に翻弄される歴史とともに描き、大賞を受賞しました。受賞した彼らの素晴らしき筆力や思考、興味の背景に、幼い頃からの多様な読書があることは容易に想像できます。

昨年公開されたアメリカ映画「パブリック図書館の奇跡」は、緊急事態における公共施設の在り方など多くの問題を投げかけていますが、館長の、「図書館は民主主義の最後の砦だ」という言葉は、存在の全てを象徴していました。大寒波で市の緊急シェルターに入れなかった七〇人余りの路上生活者が、図書館の一室を不法に占拠します。この時、彼らを助けようと立ち上がった図書館司書の主人公は、かつて路上生活者で図書館の〈知〉に救われた過去を持つていました。彼が、興味本位に取材してくるテレビキャスターに、「怒りの葡萄」の一節を諷んじるシーンは、知識が力になること、ことに文学が生きる力になることを示して印象的でした。

日本を牽引する政財界の方々の愛読書を紹介する記事をいつも興味深く読みます。最近、歴史もの、評論、実用書に比して、古今東西の文学書が挙げられることが少なくなっていることに気づきます。文学の彫琢された言葉の持つ芳醇なイメージや行間にある言葉にならないものへの想像力は、そのまま人間理解につながるものだと思います。功利的合理的であることに慣らされた私たち人間の最後の砦は、文学や哲学や芸術かもしれません。

目次

○ 巻頭コラム「人間の最後の砦？」……………1	○ 第7回林芙美子文学賞表彰式……………7
○ 没後60年 火野葦平展 ―レットルはかなしからずや― ……2~3	○ 天変地異と文学展
○ リニューアル&開館日記念 村田喜代子講演会……………4	○ (共催)九州の現代川柳作家展
○ 「書くものは焦土の八幡にそろっていた」	○ 友の会新規会員募集
○ 収蔵資料紹介 杉田久女直筆原稿「観自在菩薩」……………5	○ 展覧会 開催予告……………8
○ 「北九州市立文学館紀要」第3号	○ 第29回特別企画展
○ 常設展示 資料展示替え	○ 「絵本作家いわむらかずおの世界(仮称)」
○ 第11回「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクール……………6	○ 第30回特別企画展「北九州の詩人たち(仮称)」
○ 第12回 子どもノンフィクション文学賞表彰式	○ YouTubeチャンネル開設
	○ お祝い・お梅やみ/寄贈者・提供者、提供雑誌

火野 葦平展

没後 60年

レットテルは
かなしからずや

令和2年 11月21日(土)

— 令和3年 2月14日(日)

開館時間 9時30分～18時(入館は17時30分まで)

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)、
年末年始(12月28日～1月4日)

観覧料 一般500円(400円)、中高生120円(90円)、
小学生60円(40円) *1日130人以上の団体料あり

※本展覧会開催期間中は、本館の常設展示「山田久松の書道展」も同時開催されます。詳しくは本館までお問い合わせください。

〔第28回特別企画展〕

レットテルはかなしからずや、さら
なかと、秋ふかけぬ、もろもろの果実茶
みのり、うづたか、うづたはにあれ、
そのにほひ、かぜにかぜり、そのうら
めいた、かまし
めみからし
うぐい
をかふり
さへんと
こころあせれど
びいどろり
ばんのおもてに
はらねるかみの
せかいに、いづべも
あらぬおもいは
しゆくめいのいのすかちしや
げにびいどろりのレットテルはかなしからずや
しよぶじやごんごんかつじょうはちにて



主催/北九州国立文学館
協賛/ NHK 北九州放送局、朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞社、西日本新聞社、
福岡放送局、北九州放送局、FBSラジオ、FBSテレビ、FBSラジオ、FBSテレビ、CHOS FM
協力/小倉新聞社、大野葦平資料館

北九州市立文学館
Kitakyūshū Literature Museum



昨春秋はリニューアル後初の、二八
回目の特別企画展として、「没後六〇
年 火野葦平展—レットテルはかなしからずや—」を開催しました。二〇二〇
年に没後60年となった北九州若松出身
の芥川賞作家・火野葦平。その全体像
に迫る展覧会となりました。

本展の副題は葦平直筆の色紙から採
りました。「レットテルはかなしからず
や」から書き出される色紙には、詩と
彩り豊かな果物と、瓶に貼られたレッ
テル(ラベル)に閉じ込められた河童
が描かれています。葦平は、戦中には
「兵隊作家」と呼ばれるなど、戦後は「戦犯
作家」と呼ばれるなど、多くの「レッ
テル」を貼られた作家です。本展はそ
のレットテルに向き合うかをテー
マにしました。

展覧会は三部構成で、第一部では
「青春の岐路 玉井勝則から火野葦平
へ」と題し、生い立ちから、火野葦平
の筆名を用いて創作活動を行った頃ま
でを紹介しました。ここでは早稲田第
一高等学院時代に書いた童話「鴨の日
記」の自筆原稿や、二一〜二四歳頃を
書いた自伝的小説「青春の岐路」の創
作ノートのほか、葦平の詩「山上軍艦」
に画家の青柳喜兵衛が絵をつけた色紙
などを展示しました。

第二部は「兵隊作家 芥川賞受賞か
ら公職追放まで」。日中戦争の勃発に
伴い、葦平は小説「糞尿譚」を友人に
託し、出征、第六回芥川賞を受賞しま
す。この頃から、戦後の公職追放処分
を受けるまでを辿りました。

らの手紙や芥川賞受賞後に友人である
星野順一に宛てた書簡などのほか、戦
地で記し、「麦と兵隊」に始まる〈兵
隊三部作〉などの作品の基となった従
軍手帳などを展示しました。

第三部「おゆるし下さい。さやうな
ら 追放解除から自死」では、一九五
〇年に追放が解除されて後の精神的な
執筆や、その他の仕事などを紹介。そ
して六〇年、自ら命を絶つ最期までを
取り上げました。代表作である『花と
龍』の創作ノートや、三度の海外旅行
の際の手帳などを展示しました。また、
初公開資料として展覧会の準備中に発
見された新資料「九月二十五日記」も
展示しました。自死の四ヶ月前に書か
れたものと推定され、当時の葦平の不
安な心境が吐露された貴重な資料で
す。

(展示資料点数 約200点)

アンケート

・作家火野葦平の一生、心の変遷がよ
くわかる展示だった。遺品がたくさ
ん残っていることにも感心した。

(70代・小倉北区)

・北九州出身と知りながら、あまり関
心を寄せていなかったが、企画展を
ゆつくりみる機会があり、とても心
動かされるものがありました。

(60代・小倉北区)

・写真や資料が多く、葦平の人間性が
感じられる展示だった。

(40代・八幡西区)

◆開会記念講話

二〇二〇年二月二日

火野葦平展の開会を記念し、NHKエデュケーショナル特集文化部長プロデューサーの渡辺考さんに「葦平のまなざしの力」テレビ屋を見た小説家の神髓」と題して講話をいただきました。渡辺さんは二〇一三年にディレクターとして「NHKスペシャル 従軍作家たちの戦争」、「E TV 特集 戦場で書く」火野葦平の戦争」を手がけられ、その取材をもとに『戦場で書く 火野葦平の二つの戦場』を上梓されました。

二〇一九年一二月、アフガニスタンで凶弾に倒れた葦平の甥でペシヤワール会現地代表の中村哲さんと、その年の五月、若松と一緒に歩いた思い出から話しはじめられました。一三年、葦平の番組を作る取材で中村さんと出会い、それ以来、色々なお話を聞かれました。中村さんは、葦平の作品は庶民へのまなざしが根底に貫かれており、自身のペシヤワールでの活動は、葦平がアジア各地で人びとに寄り添おうしていた視線と重なる、とおっしゃったそうです。

渡辺さんが葦平に取り組まれたのは、戦争の問題について考える中で歴史学者の成田龍一さんに相談したところ、火野葦平をやってはどうかと言われる、北九州市立文学館に寄託された従軍手帳を見たことがきっかけでした。

それを基に中国、フィリピンへ取材に向かったが、中国では「葦平の戦争のヒーロー」として取り上げるならば許可できない」と言われ、今も厳しい見方をされている現実を感じたそうです。フィリピンでも、当時を知る人たちは日本に好意的でないこと思い知らされました。葦平は、太平洋戦争に関しては欧米からアジアを解放することを本気で信じていたようだが、従軍手帳は現地の人びとと一緒に目線で書かれており、幼いころから港湾労働者とともにあった葦平のやさしさ、温かさがあると話されました。

葦平の母、マンさんは中村さんに繰り返し、「弱いものをかばう」こと、「職業に貴賤はない」ことを教えていたそうです。葦平もまた、その教えを受けていたでしょう。今、葦平を読み返すことで今の時代に警鐘を鳴らす言葉が出てくるのではないかと思う、と話され、葦平の眼差し、想いに触れる講演会となりました。



渡辺考さん

アンケート

・弱者側にたつ、権力を礼賛しないと
いう渡辺さんのテーマと葦平の庶民へのまなざしが相まって、どんな時代であつても志を持って生きねばと思いました。(30代・小倉北区)
・火野葦平のやさしさ、温かさに根差した生き方、考え方にふれることができ、葦平のイメージが大きく変わりました。(40代・北九州市内)

◆連続文学講座(全三回)

《第一回》

二〇二一年一月二三日

坂口博さん(火野葦平資料の会会長)
「火野葦平の一九三〇年代」中村勉との活動」

一九三〇年代、葦平は中村哲さんの父で、義弟の中村勉と労働運動を行っていました。本講座ではその内情について、葦平の『青春の岐路』を読み解き、当時の葦平の思想、中村勉との関係についてお話しいただきました。

《第二回》

二〇二一年一月三〇日

増田周子さん(関西大学教授)
「火野葦平 一九五五年」アジア諸国会議とその後」

一九五五年、葦平はインド・ニューデリーで開催されたアジア諸国会議に日本代表団の一員として出席しました。会議の様子や、その時の葦平の動向、心境について葦平の手帳や参加者

の著作などからご紹介いただきました。

《第三回》

二〇二一年二月六日

稲田大貴(北九州市立文学館学芸員)
「火野葦平展のつくりかた」
担当学芸員として火野葦平展の制作にあたり、火野葦平という作家、実際の資料とどのように向き合い、考え、組み立てたのか。展示構成の他、図録、広報物などの制作物を例に、展示会の設計思想についてお話ししました。



坂口博さん



増田周子さん

アンケート

・(第一回) 資料が良く整えられて分かりやすい説明で当時の状況が浮かびよく理解されました。(70代)
・(第二回) アジア諸国会議の主席のインドの状況、旅先での触れ合いなど内容が目につく説明でよく理解することができました。良い体験でした。(70代・小倉南区)
・(第三回) 展示会の裏側コンセプトを決めることから資料の選定などおもしろく、ご苦労された点などにも残りました。(60代・八幡西区)

リニューアル&開館日記念 村田喜代子講演会 「書くものは焦土の八幡にそろこいた」

二〇二〇年一月一日

リニューアルと開館一周年を記念して、作家の村田喜代子さんの講演会を開催しました。抄録をご紹介します。



一九四五年に八幡に生まれ、七歳になります。先ほど紹介された『八幡炎災記』と『火環』は溶鉱炉の火をイメージしています。編集者に「村田さんの八幡の話は面白いから、八幡で生まれ育った話を連載しませんか」と言われたのがきっかけで、よし、溶鉱炉のように熱く燃えた女の子がいたんだよ……と書いていった道中記のような作品です。私の人生は小説のあゆみと似ています。

思い出を遡ると、小さいとき親類の住む炭鉱の街に行きました。その時に見た夕暮れのボタ山が怖かった記憶があります。このとき「斜面が怖い」という意識が生まれました。以来ずっと続いている斜面恐怖症のせいで、帆柱山もなんとなく怖かった。その斜面をケーブルカーが少しずつ動くのも、人

の目を盗んでいるようで不思議でした。

祖母が時々白い着物に白い脚絆で山頂近くの神社にお参りに行っていました。似たような白づくめのお婆さんたちといるのが異様でね。「白い姿の皆でケーブルカーで空に昇っていくのかな……」なんて想像していたら、夕方ちゃんとお婆さんは帰ってくるでしょう。「あれっ」なんて思っていました。小説を書き始めたころ、この話を『鋼索電車』と題して書きました。

製鉄所門前に祖母に背負われて行った思い出もあります。広場の両側に大人が沢山集まって、ただスポンと空いた真ん中をずっと見ていて、子供心に不思議な記憶でした。のちに新聞記者が調べてくれて、一九四九年の昭和天皇のご巡幸だったと分かりました。写真では傘を持つている人もいて、そうそう、そんな天気だったなって。天皇を見たかは覚えていないんですけど。

先ほどの紹介で芸術院会員とありましたがその話をしますと、会員になった年は宮中に呼ばれるんですね。数人ずつのテーブルに天皇皇后や秋篠宮夫妻が順番に廻ってこられる。昭和天皇さんが来られた話、利いた風なことを言うのは嫌で、やっぱり八幡のことを「おじいさまのおいでを祖母に背負われて待った覚えがあります」と話しました。こんなふうにならずと昔の八幡を背負っている感じがしています。

今日は『鍋の中』や『蕨野行』に書いたのとは違う話をしましょう。小学校は子どもが多かったからお便所も沢山並んでいました。風が吹くと隅の蜘蛛の巣がふわっと上下するのを「息をしているみたい」と思っていました。映画館では、壁を通して役者の声が聞こえる。「あ、市川雷蔵」「片岡千恵蔵だ」と、壁が生きているみたいでした。こんなふうにならぬお便所って本当に面白いな」と感じた話を一二編書こうと最初に『12のトイレ』としました。

最後にどうしても入れたくた加えたのが、炭鉱のお金持ちの「白鳥使所」です。汲み上げたあとに鳥の羽根を入れるんです。にわたりの沈むのが駄目、水鳥は軽いから浮く。水面が白くなって、ふわっと浮くんです。年上の友達から聞いた話なんですけど、もう知るひともないでしょう。結局『13のトイレ』になってしまいました。

子どもの目に不思議に映った「小さな話」が、降るように積もり、集めて「小説」として書いてきました。八幡で沢山の題材を貰ったと思っています。

先日寄稿依頼を受けて読み直し、火野葦平も好きになりました。葦平は従軍中、小さな手帳に記録を残しています。最前線で毎日書いた。つまり書くことは生きている証ですね。小さな字

を読んでいたら蟻の記述があつたんです。そんな弾丸が飛び交うような状況で蟻に注目しますか？ 絵まで添えてあつて、私は泣けてきました。

絵を取り上げる「偏愛ムラタ美術館」というエッセイを長く連載していますが、次号ではこの蟻の絵のことを書きました。作家の感受性は独特ですね。葦平は小説でも戦争を賛美するのではなく、戦争で苦しむ人の心を描いています。人間性に惹かれ、コロナで自粛中に沢山読みました。

村田さんの寄稿（そのまんま、葦平）は火野葦平展図録に掲載されています。質疑応答では来場者から「自粛中はどう過ごされましたか」という質問がありました。子どもの頃から家に居るのが好きだったし、普段から机で書いたり資料を読む生活を送っているので、作家としては自粛自体は苦ではありませんでした。

ですが、娘もコロナ病棟で働いていてしばらく会えていませんし、友達とも電話しかできません。落ち着くまで皆で乗り越えなければならぬと思っと思っています。



収蔵資料紹介 杉田久女直筆原稿 「観自在菩薩」

本資料は、杉田久女の長女・石昌子さんが久女資料として長年保管されたのち、二〇〇一年に北九州市に寄贈されました。当館では令和二年度の収蔵品展で初公開しました。

久女の書簡や執筆にも使用されている「KOKURA FUJIMOTO」の四百字詰め原稿用紙三四枚に書かれ、二つ折りにして紙縫り紐で綴じられています。一枚目一行目に「瀧野須寿子」と署名があります。筆跡や言葉遣いが久女資料と酷似していること、作中の事象が久女の出来事と多数符合することから、久女の手になる私小説的作品と考えられます。現時点では掲載・収録等は確認されていません。なお、他に瀧野須寿子名の原稿作品は、久女作品に限らず未確認です。

末尾に「九年六月十六日記」とあり、内容から昭和九年（一九三四年）と推定されます。

内容は、主人公・小夜子が、俳句の師である「岸先生」に会うため上京した「花の旅」から一ヶ月が経った、五月のある日から始まります。指導している女性俳句会での違和感をきっかけに、小夜子は次第に猜疑心にさいなまれます。句作にも自信を失い、周囲への疑心暗鬼を深め、遂には岸先生に引退の電報を打ちます。不安が払拭できず、観音経を読み、観音像に祈る孤独な日々を過ごします。しかし、それぞ

れの花を咲かせる庭の草木を見るうち、独自の境地に思い至るのでした。――

久女は一九三二年春、主宰誌「花衣」を創刊しました。七月「ホトトギス」

で初巻頭を得、十月に同人となります。九月に「花衣」を五号で終刊したのち、自らの句集刊行を強く願うものの、師である高浜虚子に容れられません。次第に周囲との軋轢を強め、三五年頃からは次第に句の輝きも陰りはじめます。虚子は、久女から三四年五月から十二月までに送られたとみられる二〇通の書簡・電報をもとに、久女没後の四年、小説「国子の手紙」を発表してきました。久女の書簡の原文は確認できていませんが、おそらく、抜粋・再編が恣意的に行われたと思われま。それによって、後年の久女のイメージが作られたとも言えます。

「観自在菩薩」は「国子の手紙」と合わせ鏡のようになつており、この時期の久女の状況を知るうえで貴重な資料といえます。この時代に詠んだ俳句や随筆の背景を窺うこともできます。久女の教

養の深さや関心の幅広さなども窺い知ることのできる大変興味深い資料です。翻刻全文は「北九州市立文学館紀要 第3号」に掲載しています。

*「北九州市立文学館紀要」第3号

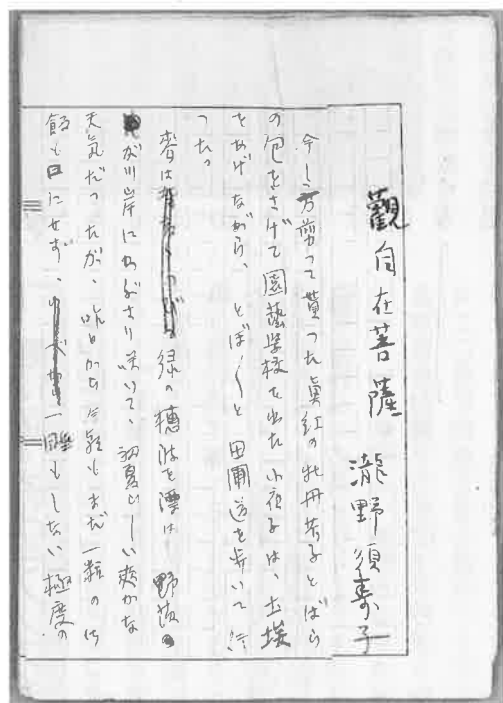
二〇二二年三月三十一日刊行

《目次》

- ・「資料紹介」杉田久女 原稿「観自在菩薩」翻刻・注釈（小野芳美）
- ・「資料紹介」劉寒吉 昭和三〇年ラジオ小説版「祇園太鼓」及び、自筆原稿「祇園太鼓」解題・翻刻（稲田大貴）

- ・主な寄贈資料 二〇一八（平成三〇）年度、二〇一九（平成三一・令和元）年度

文学館、及び全国の主要図書館などで閲覧いただけるほか、当館HPでも公開しています。



「観自在菩薩」一枚目

常設展示 資料展示替え

○現代作家コーナー展示替え

二〇二〇年十二月

- ・田中慎弥 原稿「燃える家」、創作ノート「切れた鎖」（複製。原資料は田中絹代ぶんか館所蔵）

- ・山崎ナオコラ 創作ノート「美しい距離」、手帳（二〇一四年）（複製。原資料は個人蔵）

- ・福澤徹三 校正稿「東京難民」
- ・末永直海 原稿「百円シンガー極楽天使」

- ・リリー・フランキー 原稿「東京タワー オカンとボクと、時々、オトン」

など全七点。

○デジタル展示追加

二〇二一年四月

- ・森鷗外 文芸雑誌「しがらみ草紙」創刊号（一八八九年一〇月）

- ・杉田久女から橋本多佳子宛書簡三通
- ・火野葦平 原稿「鶴の日記」

- ・雑誌「白土」創刊号（一九二五年六月）
- ・劉寒吉 原稿「鷗外の小倉時代」

- ・リリー・フランキー 原稿「東京タワー オカンとボクと、時々、オトン」連載第二回

など全一一点。

今後も定期的に資料を入れ替えてご紹介していきます。

第11回「あなたにいたくて生まれてきた詩」コンクール



展示の様子

「の世界」ではみずかみかずよ賞、岩本静さんの「時間と私」が朗読されました。

受賞者 小学校の部（敬称略）

宗左近賞Ⅱ 寺内紗優（京都府京都教育大学附属小中学校） みずかみかずよ賞Ⅱ 河合博輝（北九州市立西小倉小学校） 北九州市長賞Ⅱ 井上昊祐（京都府京都教育大学附属小中学校） 北九州市教育長賞Ⅱ 森凜佳（京都府京都教育大学附属小中学校） 北九州市立文学館長賞Ⅱ 蔵本昂空（北九州市立曾根小学校） 佳作Ⅱ 10名

学校賞Ⅱ 北九州市立井堀小学校、日仏学院パリ日本人学校

受賞者 中学校の部（敬称略）

宗左近賞Ⅱ 江田遥花（北九州市立霧丘中学校） みずかみかずよ賞Ⅱ 若本静（北九州市立霧丘中学校） 北九州市長賞Ⅱ 平田永愛（糸満市立三和中学校） 北九州市教育長賞Ⅱ 石原優（北九州市立霧丘中学校） 北九州市立文学館長賞Ⅱ 中田愛梨（北九州市立霧丘中学校） 佳作Ⅱ 10名

学校賞Ⅱ 北九州市立霧丘中学校、指宿市立南指宿中学校

このコンクールと下記文学賞は次回も開催予定ですので、小中学生のみならずのご応募を心よりお待ちしております。また、作品集は、文学館ホームページでご覧になれます。

表彰式は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となりましたが、一二月二四日～二月一四日まで文学館交流ひろばで受賞作品の展示を行いました。また、RKBラジオ「アナウンサ

第12回 子どもノンフィクション文学賞表彰式

第12回を迎える子どもノンフィクション文学賞は、新型コロナウイルスの影響により、人と会って話を聞いたこと、外に出て調べることができなかったこと、260作品、中学生の部は97作品、計357作品の応募となりました。今年の表彰式は、新型コロナウイルス感染症対策として、オンラインで三月二〇日に開催しました。

オンライン表彰式では、北橋市長と今川館長と選考委員の那須正幹さんが文学館にて、選考委員の最相葉月さん、リリー・フランキーさん、受賞者の皆さんはオンラインでの参加となりました。受賞者皆さんの「作品を書いた理由や受賞した喜びの声」を聴くことができ、すばらしい表彰式になりました。選考委員の皆様から、大賞、佳作のそれぞれの作品に「映画を見終えた時のような深い感動」「子どもらしい発想の産物」「コミュニケーションとは何かについて再考を促される」「死者を弔う儀式について問う優れた作品」「勇壮な男の短編小説」「紀行文のお手本のような作品」などの講評をいただいています。講評は、作品集にも掲載されています。

受賞者 小学校の部（敬称略）

大賞Ⅱ チャケレオン（ドイツ・ギムナジウム） 佳作Ⅱ 遠藤光之佑（埼玉県西

武学園文理小学校） 内田博仁（神奈川県横浜市立青葉台小学校） 選考委員特別賞Ⅱ 伊藤麦（東京都八王子市立南大沢小学校） 川口颯（埼玉県西武学園文理小学校） 中野理香（東京都渋谷区千駄谷小学校、学校賞Ⅱ 西武学園文理小学校、日仏学院パリ日本人学校、福岡雙葉小学校

受賞者 中学校の部（敬称略）

大賞Ⅱ 平家和志（東京都多摩市諏訪中学校） 佳作Ⅱ 中尾慶人（新潟県上越教育大学附属中学校） 秋篠宮悠仁（東京都お茶の水女子附属中学校） 選考委員特別賞Ⅱ 大石寛子（北九州市立飛幡中学校） 新池谷悠（群馬県前橋市立第一中学校） 前田海杜（北海道希望学園北嶺中学校）、学校賞Ⅱ さいたま市立浦和中学校、上越教育大学附属中学校、中野市立高社中学校



記念撮影の様子

第7回林芙美子文学賞表彰式

二〇二二年二月二〇日

第7回林芙美子文学賞の表彰式を、オンライン開催しました。

全国から寄せられた396編の応募作品の中から、東京都在住の朝比奈秋（あさひなあき）さんの「塩の道」が大賞に選ばれました。

表彰式には最終選考委員である井上荒野さん、角田光代さん、川上未映子さんの他、前回佳作受賞者の芝夏子さんもオンラインで参加されました。

大賞受賞の朝比奈さんは「書き始めるときは、いつもゴールの決まっていないマラソンを一人走るような気分です、いつかどこかにたどり着くのかという気持ちの中、自分の中のエネルギーに従って書き進んでいくうちに、この小説もなんとか書き終えることができました」と語りました。

最終選考委員からは、受賞について、「場面の作り方、選び方がよくできていておもしろかった」「日常の異様さを大袈裟でなく書いていた」「見事な迫力があつた」などの講評をいただきました。



オンラインによる表彰式の様子

天変地異と文学展

二〇二二年三月二日～三月二日

本展は全国文学館協議会共同展示「3・11文学館からのメッセージ」の一環として企画、開催しました。今年で八回目を迎えます。

北九州ゆかりの作家をはじめとした震災後文学と、昨年来のパンデミックについて触れた文学作品を紹介しました。また、春野修二さんの流木や貝殻を使用した美術作品「いつたり、きたり」の展示も行いました。

三月二七日には、春野さんが「福島浜通りの海辺から『いつたり、きたり』旅する流木——その先の10年へと向かう」と題して講演を行い、作品制作への思いを話されました。

北九州市危機管理室協力の協力のもと、岩手県釜石市、熊本地震、九州北部豪雨での被災と復興の様子、令和二年七月豪雨の被害状況をパネルで紹介しました。



震災展会場風景

共催 九州の現代川柳作家展

二〇二二年三月二日～三月二日

川柳くろがね吟社が主催し、九州の現代川柳作家の作品を紹介する展示が行われました。

会場には、九州7県から全日本川柳協会所属の作家が揮毫した色紙91点が並びました。くろがね吟社主宰の古谷龍太郎さんの句「かなしみの海花束が沈まない」は、東日本大震災のことを念頭におきつつ詠まれたものだということ。その他、石橋陸朗、手嶋吾郎など先達作家の自筆短冊や色紙、現代作家の句集、九州で発行されている川柳誌なども展示されました。来館者は人情、世相、風俗などを盛り込んだ作品をゆっくり鑑賞していました。

三月一四日には、古谷さんが、「九州ゆかりの川柳作家」と題して講演を行い、川柳の魅力を話されました。



友の会新規会員募集

友の会活動は、文学や文学館に関心がある人々が集まり、文学・文芸に関する知識教養、理解を深めるとともに、文学館の活動を支援することを目的とし、どなたでも入会できます。

現在、新規会員を募集中！会員期間は二〇二二年四月一日～二〇二二年三月三十一日の1年間で、会費は2000円です。

会員の特典として、

- 常設展示の観覧料が無料
- 特別企画展の開会式にご招待
- 特別企画展の招待券を1枚進呈
- 特別企画展の図録を1冊進呈
- 新・文学館作品集を1冊進呈
- 文学館行事の優先的参加の案内
- 会報、館報の配布 など。

文学館が行う3つの文学賞の作品集のいずれか1冊を進呈する特典が新たに追加されました。在庫がある歴代の作品集も対象です。また、友の会会員は、入館の消毒、検温、連絡先の登録の際に、会員証の番号を伝えるだけで手続きがひとつ省略され、スムーズに入館できます。

入会方法は、文学館の窓口で会費をお支払いいただくか、郵便振込も利用できます。

問い合わせは、北九州市立文学館友の会事務局 ☎093-571-1505

第29回特別企画展

絵本作家 いわむらかずお の世界 (仮称)

7月17日(土)～9月20日(月・祝)

展覧会 開催予告



「14ひきのせんたく」より ©いわむらかずお

今夏の特別企画展は、絵本作家・いわむらかずおさんの展覧会を開催します。いわむらかずおさんは一九七五年より、生まれ育った東京から自然豊かな栃木県益子町に移り住み、創作活動を続けてきました。

フランス、ドイツ、台湾などでも翻訳されロングセラーとなっています。展覧会では、「14ひきのシリーズ」「トガリ山のぼうけんシリーズ」「ゆうひの丘のなかまシリーズ」など森の動物たちのシリーズの絵本原画、創作資料などを展示し、いわむらかずおのこれまでの足跡と作品を紹介いたします。



「こりすのシリーズ」より ©いわむらかずお

第30回特別企画展

北九州の 詩人たち (仮称)

2021年10月下旬から開催予定

YouTube チャンネル開設

昨秋開催した火野葦平展を学芸員が紹介
2021年4月下旬開設予定

主催 北九州市立文学館
企画協力 いわむらかずお絵本の丘美術館

お祝い

・高樹のぶ子さん(作家)が『小説伊勢物語 業平』(日本経済新聞出版)で、第62回毎日芸術賞を受賞。
・野中亮介さん(俳人)が『つむぎうた』(ふらんす堂)で、第60回俳人協会賞を受賞。
・角田光代さん(作家)が、『源氏物語』(全三巻)で第72回読売文学賞 研究・翻訳賞を受賞。
・まはら三桃さん(作家、北九州市八幡西区生まれ)が、第53回北九州市民文化奨励賞を受賞。
心からお祝い申し上げます。

お悔やみ

・玉井史太郎さん(火野葦平三男) 二〇二一年一月六日にご逝去、83歳。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

寄贈者・提供者

朝倉市秋月博物館、阿部誠文、有川公一、有澤裕紀子、石崎等、井上靖記念文化財団、岩岡中正、岩下祥子、上田薫、梅本静一、おのみち林美美子顕彰会、大阪俳句史研究会、神奈川近代文学館、金沢湯涌夢二館、鎌倉文学館、川村湊、観世書房、木戸淳一、北九州中小企業団体連合会、九州俳句作家協会、九州文学同人会、黒岩淳、上月ひろし、こおりやま文学の森資料館、小倉傘傘川柳会、小倉南文化連盟、さい

たま文学館、さかい利晶の杜・与謝野晶子記念館、書肆侃侃房、新宿区立漱石山房記念館、鈴木正明、青土社、全国文学館協議会、筑紫野市歴史博物館、調布市武者小路実篤記念館、徳島県文化振興財団、内藤明、中島晶子、西久保祥子、西日本文化協会、日本近代文学館、能村研三、花書院、姫路文学館、ふくい風花随筆文学賞実行委員会、福田英子、古谷龍太郎、ふくやま文学館、文京区立森鷗外記念館、門司俳句協会、森鷗外記念会、森鷗外記念館(津和野町)、柳生しゅん子、八幡西俳句協会、山本飛雲、行橋市教育委員会・行橋市歴史資料館、吉村昭記念文学館

提供雑誌

藍、青嶺、馬酔木、阿蘇、花鶏、穴生文芸、あん、いのちの籠、沖、九大日文、玄海、自鳴鐘、scids、青穂、船団、川柳 くろがね、空、卓上作法、タルタ、天籟通信、とびうお、新翠、虹野、浜木綿、ふよう、ぼち袋、八雁

2021年3月31日 発行

北九州市立文学館

〒803-0813
北九州市小倉北区内4-1
TEL 093-571-1505
<https://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/>

開館時間

9:30～18:00 (入館は17:30まで)

休館日

毎週月曜日(月曜日が休日の場合は翌日)
年末年始